



13枚目の ハンカチ



廃校の決まった小学校。
1年生のタカシ君が「あ。座
敷わらし！」と叫んだ

choji

ホワイトクリスマス

ミハルは、少し先生からはなれました。

歩きながらハンカチを高く持ち上げて、振りました。

「天にいるユウヤ君に見てもらおうおう」

ふと、そんな風に思ったのです。

みんなも、それに続きました。

12人の子たちが振るハンカチが、木立の中をぬっていきます。

天からは「白い波」のように見えたかも知れません。

まるでそれに応じるように、雲ひとつない青空から、風に吹かれたのか、粉雪が舞ってききました。

翌日の朝。

冬休みの始まった日、ひと晩で「村」も「山」も、一面の「銀世界」に変わっていました。

今日はクリスマスです。

「サンタさん」がプレゼントしてくれた「おもちゃ」や「お菓子」や「本」も、とっても嬉しかったけれど、「杉の子小学校」の「ハンカチ」は特別です。

ミハルは、それを胸にいだいたまま、真っ白になった「景色」を、いつまでもみつめていました。

終業式

「今日でみなさんとも、この学校にもおわかれですね」

先生は、しんみりとした口調（くちょう）で言いました。

ミヤガワ・ヒロミ先生は、「杉の子小学校」の「たった一人の先生」です。

ミヤガワ先生は、教壇（きょうだん）からゆっくりとおりて、教室のみんなを見まわしました

。

先生と目が合ったとき、3年生の代表委員、ミハルは、少し涙（なみだ）が出そうになりました

。

通学する子が少なくなり、村の「杉の子小学校」はなくなることになったのです。「廃校（はいこう）」といいます。

みんな、おとなりの町の学校まで通うことになったのです。

4年生より上の子は、もうおとなりの町の学校に通い始めています。

「杉の子小学校」の生徒は、ミハルたち3年生が6人、2年生が3人、1年生が3人です。その12名全員が、同じ教室でミヤガワ先生の「授業（じょうぎょう）」を受けていました。

来年、はいつてくる予定（よてい）の子は、村にはいません。

3学期の終わりまでは、学校は続くはずだったのですが、村では「高学年の子まで乗せるスクールバスを町まで出そう」ということが急に決まり、2学期で学校は閉鎖されることになってしまったのです。

ですから、今日は、杉の子小学校にとっては、最後の終業式です。

不思議なプレゼント（1）

「みなさんとおわかれするのは、辛（つら）いけれど、またどこかでお会いできるでしょう」

ミヤガワ先生の目に、キラリと光るものが浮かびました。

「センセイは、どうして町の学校には行かないの？」

一年生のタカシ君が声をあげました。

「ええ。センセイもそうしたいのだけれど、町の学校も、子どもたちがへっているから、そのおとなりの市の学校にいかなくては、ならないの」

そのことは、みんな知っていましたが、やはり「さみしい」気持ちからでしょう、

「どうして？」

「どうして？」

と、声があがりました。

先生は、少し表情を固（かた）くして、だまって、教壇（きょうだん）に、もどりました。

教卓（きょうたく）の上においてあった、トートバッグから、クリスマスプレゼント用の、華やかな包み紙、をいくつか取り出しました。

教室に、ざわめきが広がりました。

「今日は、ちょうどクリスマスのイブですね」

先生は「さみしさ」をこらえるように、笑みをもらしました。

「みなさんに、ささやかだけれど、プレゼントを用意しました」

そう言ってから、自分のジャケットのポケットから、ハンカチを取り出して、広げました。

「先生が縫（ぬ）いました。ふつうのハンカチですけど、ほら」

と、ハンカチの隅（すみ）を指さしました。

そこには。。。

「杉の木」と「えがおの男の子と女の子」をデザインした、「杉の子小学校」の、校章（こうしょう）が、刺繡（ししゅう）されていました。

「わたしがぬいました。みんなが、この学校を忘れないように。」

「忘れない」

タカシ君が声を、はりあげました。

ミハルたちも、

「忘れないわ」

「ぜええたい！忘れません」

と、口々に、言いました。

不思議なプレゼント（2）

少し教室が静かになってから、

「じゃ、女子の代表委員さん、プレゼントを、取りに来て」と、先生がミハルに笑いかけました。

「はい」

と、元気に答えて、ミハルは立ち上がりました。

教壇の側に行き、教卓の「上」に散らばり気味になっている、紙包みを、数えながら、そろえました。

「12人分あります？」

先生が、そうたずねました。

「あると思います」

ミハルは、束ねたプレゼントを、少し扇（おおぎ）のように広げて、もう一度確かめてみました。

確かに、12人分、プレゼントはありました。

「だいじょうぶですね？」

「12、確かにあります」

「それなら配ってあげてください」

ミハルは、1年生から「順」にプレゼントを配りました。

「まだ、開けないでくださいね」

すぐにでも「紙包み」を開けたがっている表情の「みんな」に、先生は、そう「注意（ちゅうい）」をしました。

配り終（お）えて、ミハルは、

「あ！」

と、声をあげました。

自分の分がないのです。。。

不思議なプレゼント (3)

「先生。。。わたしの分（ぶん）がありません」

クラスでいちばん「落ち着いている」はずのミハルも、すこし「あわてた」声を出しました。

「おかしいわね？」

先生も、不思議そうに首をひねりました。

「だれかに二枚くばったんじゃない？」

と、男子の代表委員の、サトル君が、声をあげました。

「みんな確かめてみなよ」

「二枚もらった人いる？」

ミハルは困って、クラスを見まわしました。

みんな首を横にふっています。

「いいわ」

先生が言いました。

「みんな、一度、プレゼントを前の人に渡してください」

それからミハルに、

「集めて、持ってきてください」

と、言いました。

ミハルは奇妙な「気持（きもち）」になりました。

それでも気をとりなおして、いちばん前の席の子まで、リレーされてきた、プレゼントの「包み」を、教卓まで持っていきました。

座敷童（1）

ミヤガワ先生は、
「ありがとう」
と、ミハルに言ってから、
「席に戻ってください」
そう、続けました。

ミハルは「奇妙（きみょう）」な、気持ちを持ったまま「自分の席」に着きました。

先生は、みんなに見せながら、
「ひとつ、ふたつ」
と、数えていきました。

ミハルは、目をパチパチとしばたきました。
何と！
それは、ちゃんと「12人分」あったのです。

「ほら！」
と、サトル君が、叫（さけ）びました。
「ミハルちゃんが、間違えたんだよ！」
男子の「代表委員」として、ちょっと、ミハルに、「はりあう」気分になっていたのかも知れません。

「それなら、男子の代表委員さん、配ってください」
今度は、先生は、サトル君を指名しました。

サトル君は「はりきった様子」で、立ち上がり、先生から「プレゼント」の束を受け取り、数えてから、クラスの「みんな」に配りはじめました。

ところが。。。
今度は、サトル君が、
「あっ！」
と、おどろきの声をあげる番だったのです。

座敷童 (2)

「先生。。。ぼくの分がありません」

サトル君は、「信じられない」というように目をみひらいて、先生の方に顔を向けました。

「座敷童子（ざしきわらし）だ！」

1年生のタカシ君が、とつぜん、大きな声でいいました。

「そう！そうよ。先生が、お話してくれた、座敷童子よ」

2年生のヨウコちゃんも、うなずきました。

他の何人かの子も、うなずいています。

先生は「民話」や「昔話」を、1年生2年生にも分かるように「易（やさ）しく」3年生にも「面白く」話してくれる「名人」なのです。

つい、この間も「座敷童子」という、民話を「お話」してくれたばかりです。

「座敷童子」

というのは、いたずら好きの「子供の妖精（ようせい）」で、大人が子供に「お菓子」を配ってみると、ひとつ足りない。

子供たちの数を数えると、本当の人数より1人多いのに、だれが「座敷童子」がわからない。

いったい、だれが多いのかわからない。

そんな「お話」なのです。

思い出（1）

「そうかも知れないわ」

ミヤガワ先生まで、うなずきました。

「先生が、お話したから、本物の『座敷童子』が、あらわれたのかも知れないわ。妖精は『自分の話をしてくれるヒトたち』のところにやってきて『イタズラする』のが、好き、だとも聞いているわ」

タカシ君は、目を丸くして、教室の「子」の人数をかぞえはじめました。

「そんな～」

立ったままサトル君が、首を大きく横にふりました。

「ふふ」

先生が、「まるで自分がイタズラした」ように笑いました。

「先生が、いけなかったわね。もし、みんなと同じ、『杉の子小学校』の刺繍がはいった、ハンカチを欲しがる『座敷童子』がいるとしたら。。。

その子にも『プレゼント』してあげなくてはね」

クラスの子たちは、それぞれに「顔」を「見合わせて」います。

「そうですね」

ミハルは、何か、思い当たったようです。

「ユウヤ君にも、プレゼントしなければ。。。」

思い出 (2)

クラスが、急に「シン」としました。

みんなの心に、ユウヤ君のことが、よみがえったのでしょうか。

ユウヤ君は、ミハルと同じ年に「杉の子小学校」に入学した子なのです。

今もし、学校にいれば「3年生」ということになります。

けれど、入学したばかりの頃に「小児白血病（しょうにはっけつびょう）」という重い病気にかかってしまったのです。

県の「大学病院」に入院したのですが、脊髄移植（せきずいいしょく）という「とても難しい治療（ちりょう）」でしか「本当に治す方法」がなく、発病（はつびょう）から、わずか1年で、天に「召されて」しまったのです。

「ぼく、プレゼントいりません」

と、まだ立ったままでいた、サトル君が、ミヤガワ先生に、言いました。

「ユウヤ君が、持っていったんなら、ぼく、それでいいです」

先生は、しずかに首を、横にふりました。

「今日は授業もないし、お天気もいいし、みんなで、ユウヤ君のところに行きましょう。わたしは、みんなを忘れないように、もう一枚自分用のハンカチを作るわ。わたしのハンカチを、ユウヤ君に『お供え』しましょう」

「うん、うん」

いちばんにタカシ君が、賛成（さんせい）しました。

「ユウヤ君のところに行こう！」

他の「みんな」も、もちろん「大賛成」をしました。

ユウヤ君の「お墓」は、学校から歩いて30分ほどの「お寺」の「墓地（ぼち）」にあります。

立派な「お寺」ですが、今では、和尚さんも、お坊さんも住んではいません。

村の人たちみんなでお掃除をし、「荒れない」ように、管理（かんり）をしているのです。

仏事（ぶつじ）のあるときにだけ、町から「お坊さん」が、やってきます。

学校から、お寺に続く、ゆるやかな坂道を歩く、ミヤガワ先生と12人の子供たちを、冬の陽光が、優しくつつんでくれていました。

ユウヤ君の「お墓」は、きれいに洗われて、お花が供えられていました。

。。。ユウヤ君の、お父さんとお母さんは、今は大きな都会に「お引っ越し」をして、ユウヤ君の「命日（めいにち）」くらいにしか、村には帰ってきません。

その「お花」を、だれが、「たむけた」のか、ミハルには、察（さっ）しが付いていました。

先生は、ハンカチを取り出し、きれいに畳み直して、ユウヤ君の「お墓」に置き、その上に、手頃な「石」を拾って、おきました。

手を掌（あ）わせました。

みんなも、手を掌（あ）わせました。

それから、先生のプレゼント「手縫いのハンカチ」の包みを、配りました。

勿論、今度こそ、12人全員の手にはプレゼントは、渡りました。

「包み紙あけてください。紙はポケットに入れてね」

先生の言葉に、みんな歓声をあげました。

帰り途（みち）、ミハルは、そっと先生に近づきました。

先生が、お正月明け、3学期の初めに、ときどき「マジック」を見せてくれることがあったことを、思い出して、確かめてみたくなったのです。

「先生。。。座敷童子のお話。。。あれは？」

小声で訊（き）きました。

「先生、名人ですよマジック。。。」

先生は、ミハルの「顔」を見て、小さく首を振り、ウィンクしました。

それが、

「言っちゃだめ」

という合図だということは、すぐに分かりました。

